

里地里山の保全・活用の取組における課題と技術的方策等

分類	地域活性化／環境教育・エコツアー
手法名	オオムラサキ保護を軸とした環境教育活動と生きもの豊かな里山づくり
主体	NPO法人自然とオオムラサキに親しむ会・北杜市オオムラサキセンター
背景(地域の課題)	<p>山梨県北杜市では、昭和40年代に冷害対策として、田植えの時期を早くする方法が考案され、クヌギの若葉の時期より田植えが早くなった。このため地元で「かっちぎ」と呼ばれるクヌギの新芽を田植え前の水田に投入し肥料化する農法が行われなくなり、里山と農業の結びつきが弱くなった。また昭和40年代後半から、化学肥料や化石燃料の普及により、農家にとって里山林は必要では無くなってしまった。</p> <p>人々は里山林の利用方法を見いだせないまま放置してしまい、手が入らなくなった林はササやツル草に覆い尽くされ、ゴミが不法投棄される事例も見られるようになった(写真1)。</p>
手法／方策の詳細	<p>NPO法人自然とオオムラサキに親しむ会では、平成19年に荒れてしまった里山林を、市民の手で再生する活動を始めた。また、オオムラサキセンターを拠点に環境・体験学習を実施している。</p> <p>1) 里山再生活動と効果      かつての里山の原風景を取り戻すために次の取組を実施。      ① 生い茂ったササを刈り取り、倒木を整理して明るい雑木林を再生(写真2)。      ② 生き物が集まる落葉広葉樹の苗を植林して森を再生。      ③ 台場クヌギを保存するため、太くなりすぎた枝を切り落として萌芽更新。      ④ 昔のように雑木林の木で薪炭を生産したりキノコを育てる活動を実施。      このような活動を行った結果、草花が豊かになり、蜜を吸う虫や葉を食べる虫が集まるようになった。そして虫を食べる動物としてハチや鳥が集まり、シロスズカミキリなど樹液を出す働きをする虫も集まるようになる。これによって、ますます多くの昆虫が集まり、生きもの豊かな里山林が再生することになる。</p> <p>2) 里山環境を活かした交流・環境教育活動の実践      里山再生活動や観察会・学習会への多様な参加者の受け入れ      ・地元の小中高生や首都圏の大学生などによる植樹活動      ・環境学習、観察会の実施(写真3)      特に環境学習の一環として行っている「有視界調査」によるオオムラサキの生息数調査は長年にわたって実施されており、地域におけるオオムラサキの生息実態の貴重なデータとなっている。      ・里山環境を活かした体験活動(キノコ植菌、棚田写生、カブト幼虫探し、ドジョウ掴み等)(写真4)</p>
手法・技術的視点	<p>里山整備活動によって得られる昆虫を中心とする生物多様性創出の流れを分かりやすく解説。生きもの豊かな里山を活かした取組(保全・観察会・体験活動)を一体的に行っており、他地域の保全活用モデルとして参考になると考えられる。</p>

実行プロセス・運営体制のイメージ

活動拠点となっているオオムラサキセンター周辺の環境構成



里山整備によって創出される生物多様性

図・写真資料



参考資料

平成25年度里なび研修会in長野県飯綱町パワーポイント資料「昆虫少年の森づくり」(跡部治賢)